

金

賞

『渡り鳥のルチア』

# 渡り鳥のルチア

奈良県 県立郡山高等学校三年 湊 むつみ

ルチアから見える世界は、青で真っ一つに割れていました。上を見れば、澄みきつた青空がたんさんときらめいています。下では、呑まれそうなほど深い海の青が、静かにたたずんでいます。

こうして海の上を飛んできて、もうどれくらいになるでしょう。

ルチアは渡り鳥でした。季節によって住む場所を変え、こうして海を渡るのです。

仲間たちは、自分が渡り鳥であることをみな誇っていました。どれだけ長くだって飛んでいたれる翼の力強さもそうですし、いろんな場所を訪れる自由さも自慢だったのです。

けれどルチアは。

（……わたしは、それは思えないな）

仲間にも言つた「じがないけれど、ルチアは渡り鳥に生まれた」とを、少しあざわら感じていました。

ルチアたちは、新しい街にたどりつきました。じょりしまじいを根城とします。

仲間と別れ、ルチアは街を見て回ることにしました。なかなかすてきな街でした。

大通りには石畳がしきりめられ、かかとの高い靴をはいたお嬢さんが通るたび、カコツと小気味いい音が響き

ます。

もう少し奥には、巨大な木がそびえていました。濃く、深い緑が、陽の光に照り映えています。木はあまりに高く、つづくまで飛んでいくのにルチアでも苦労しました。

この木では、他の鳥たちも羽を休めていたようでした。ルチアを知らない、この街にずっと住んでいたる鳥たちです。

ふと耳をすませば、彼らの話が聞こえました。

「いや、いや。もう裏ですか。いつものことですが、時間がすがる時は早いですね。近くにはもう冬になつていいそうだ」

「あら、あたしは早く冬になつてしましいわ。ほひ、冬はいつも、人間たちがお祭りをしているじゃない？ そのときには屋台でつまみ食いしたキイチゴのタルトのおいしいこと…あの味が忘れられないの」

そこまで聞いたルチアは、表情に影を落とすと、そつと木を飛び去りました。

冬のお祭り……ルチアは冬、この街にはいません。もっと暖かい南に行くのですから。じつは、これこそがまさに、ルチアがさびしさを感じる原因でした。

ルチアたち渡り鳥は季節によって住む場所を変えます。その土地の限られた側面しか知るところがないのです。

お祭りってどんなのでしょうか。冬、この木はどんな風になるんでしょうか。あの噴水の水も、凍つてしまつのでしょうか。

(……冬の景色って、どんななんだらか)

ルチアには知るすべもありません。街の、ほんのちよつとの姿しか知り得ない自分はよそものだと、ルチアはひつそり嘆きました。

街の片隅には、小さな広場がありました。縁におおわれていて心地よく、ルチアはそいで羽を休めてじぐじとにしました。

……木陰にたたずむうちに、ルチアは居眠りしてしまったようです。ふと気がつけば、太陽の位置が変わっていました。

帰りが遅くなつて、仲間にお小言を言われるのはじめんです。そらそらじいを飛び去るのと身をよじつて。

「ああ、待つて待つて。待つてくれないか？」

じこからか、そんな声が飛んできました。ルチアが声の主を探つてみると、少し離れたベンチに座る人間の青年に気づきました。彼は筆を握り、何やら紙に走らせています。

「今、あなたがわたしに話しかけたの？」

ルチアが尋ねると、彼は大仰に頷いて、紙を見せてくれました。

「そうだよ。ほら、見てくれ。今、きみをモチーフに絵を描いているんだ。もしきみが嫌じゃなければ、もう少し、そこにいて付き合つてくれないかい？」

青年が差し出した描きかけの絵を、ルチアはじつと眺めます。風景をそのまま切り取つたような緻密で、けれど現実よりも鮮やかに、劇的に、広場の様子が描かれています。

なかなかに素晴らしい、トルチアは思いました。自分もじいに描かれるのか、なるほどないと、悪くない。

「……じよ。あなたのモーテルになつてあげる。そのかわり、しづらくなしゃべりに付き合つても」

本当にただの気まぐれでした。けれど画家の絵に惹かれ、ルチアは初めて、人間との時間を過ごし始めます。

黙つて座つていのちも退屈ですし、ルチアはあれこれ青年に話しかけてみました。彼は休みなく手を動かしながらも、気やぐにルチアに答えてくれます。

青年は画家だと名乗りました。「うして絵を描いては売つていぬところのですが、あまり売れ行きはよくないそうです。まだまだ絵だけでは食べていけそうもない、と気恥ずかしそうに語りました。

「ほい、ぼくなんかの話はこれくらいでいいじゃないか……それより、きみの話を聞かせておくれよー」

画家はふと、田舎者らしく輝かせてそう語いました。ルチアの羽やくねばしき、興味深そうにじっと眺めます。

「きみは、渡り鳥なんだろ？」ぼくよりもずっと、広くて色とりどりの世界を知つてゐるんじゃないのかい？」

画家は筆を置いて、ルチアにずいと詰め寄ります。その眼差しがあまりに期待に満ちていのちですから、ルチアの方がたじろいだしました。

「海を渡るだけだよ……知つてらぬ」となんて、あなたと大差ないと思つけれど

「そんなことないよー。海の向こうには、ここはまるでちがう文化があるって、本で読んだんだ」

画家は憧れを語ります。

「北の半島の街には、豪華絢爛な大聖堂があるんだつて。ぼくの尊敬する画家の壁画がそこにあつてね、一度でいいから見てみたいなあ。南の方は、めずらしい花や食べ物がわんさかあつて、海はエメラルドに輝くそんなんだ。とつてもすてきだと思わないかい？」

そんなふうに、画家はいろんな土地のいろんな特徴を挙げていきました。翼のない人間なのに、よく知つてゐるなどルチアは感心しました。画家の表情は生き生きとしていて、ルチアもなんだか樂しくなります。「わたしは南からきたけれどね。うん、南の海はたしかに緑色をしているよ。あまり気に留めなかつたけれど……」メルルドみたいで、たしかにきれいだ」

「たくさんの景色を知つて、見える世界を広げたら、きっともつといい絵が描けると思つんだ。だからぼくは、きみが『いのやまし』よ。じへくだつて飛んでいける、自由なきみが」

その言葉がルチアの胸を刺しました。

「……それは。……どうだろ？ね」

画家の羨望の眼差しを、ルチアは素直に受け止められませんでした。ルチアは渡り鳥に生まれた自分が、好きではないのですから。表情を暗くしたルチアに、画家は笑つきます。

「じめん、ぼくはなにか、気にさわる」とを言つてしまつたかな？」

「あなたは悪くないよ。ただ、わたしが……わたしは、渡り鳥つて、やがしいものだと思つてしまつだけ」「やがしい？」

画家は首をかしげました。画家がまつすぐるルチアを見つめるので、ルチアは不思議と、仲間にも話したことのない自分の秘密を、彼になり話してみたいと思つてしましました。

「わたしたち渡り鳥は、その土地の限られた面しか知る事はできないの。わたしは……本当はあなたみたいに、同じ街にずっと住んで、そこを故郷だなんて呼んでみたい……そして、冬の景色を見てみたいな」「裏表だね、ぼくたちね。世界を巡りたいくぼくと、一つの街にだけじうまつたいたいきみ」

「わたしたちつて、結局、ないものねだりをしてるだけなのかしり」

ルチアはため息をつきました。渡り鳥らしからぬ願いを抱く自分がいやになってしまいます。  
けれどそんなんルチアに、画家は笑いかけました。

「それって別に、悪いことじゃないだろ？ 憧れを追い求める心が、ぼくたちの原動力だ。冬景色を見たいと書つたきみの顔は、とてもすてきに思えたよ」

画家はやうに言葉を重ねます。

「でも、よそのだなんて思わなくていい。きみはもつぱくの友達だ。ぼくらは住む世界がちがうけど、だからこそ、お互いを補えるんだろ？」

そこでルチアの心が、ふと軽くなつた気がしました。渡り鳥の自分と、これまで仲間にも言えなかつた願いが、ルチアは初めて認められた気がしたのです。

「うしてルチアは画家を気に入り、この広場をよく訪れるようになりました。

もちろん、ルチアだって仲間とエサを探したり巣を守つたりしなくてはなりませんから、毎日画家と会つわけにはいきません。けれどルチアが暇を見つけてはやってくるたび、画家は喜んで迎えてくれました。  
「今日は雪まつりの話をしてくれよー。」

ルチアと画家は、きみつてそういう話をしました。画家はルチアのために、この街の冬の様子を話してくれます。かわりにルチアは画家のために、これまで見てきたさまざまな土地のことを語つてあげました。

まったくがうはずのルチアと画家の生活が、この刹那だけは交わったのです。誰かと世界を分かち合つ」と

が、こんなにも楽しいのだ」とルチアは初めて知りました。たとえこの田で直接見ることは叶わなくても、焦がれた冬の景色を、画家のおかげで知ることができたのです。ただそれだけのことだが、どれほどルチアの心を照らしたでしょう。

だからでしょうか。ルチアは画家に、お礼のようなことをしたくなつたのです。ルチアは、いろいろ悩んだ挙句、画家へのプレゼントを木の実に決めました。この街にきて初めて食べた種類なのですが、その美味しさに感動した覚えがあるのです。市場なんかで売つているといつも見たことないですし、高い木のてっぺんに実つてるので、画家でもきっと食べたことないはずです。

(ふふん。わたしだつて、あなたが知らないこの街の魅力を見つけられるんだから)

ルチアは意気揚々と、木のてっぺんめがけて飛んでいきます。連なるようになつて、赤い小さな木の実たち。それをくちばしでつまむとしますが、

「ちよつとい。 よそものかなにしてるの」

不意に割つて入つた声に、驚いて、ルチアは動きを止めました。

いつのまにか、何羽もの鳥たちに囲まれていました。ルチアの仲間ではありません。この街にもとから住む鳥たちです。

「この木の実は、とても美味しくて、そのうえ貴重なんだ」

「よそものになんて、あげられないわ?」

「この街の鳥じゃないあんたらが、わがもの顔で飛び回つているのも腹立たしいのに、この木の実まで奪おうな  
んじゅうぱくしじー」

そうして集まつた鳥たちは、いつせいにわめき始めました。木の実をおいていけだの、早く街から出ていけだの、彼らがルチアたちを快く思つていらないのが、ありありと伝わつてきます。

ルチアは、心が冷えていくのを感じました。やつぱり自分は異物なんだ、そんなふうに思つてしまつて、胸が苦しくなります。

——けれど。そんなルチアをすくい上げるように、画家の声がふと頭に響いてきました。  
『よそのなんて思わなくていい』

『きみはぼくの友達だ』

そうだ、彼がそう言つてくれたじやないか。なにも引け目を感じる必要などありません。ルチアはルチアらしさ、自分の願いを追えばいいのです。

(一)の鳥たちによそものと言われたつて……わたしには彼とこう友達がいるんだからー。)

ルチアはそう自分を鼓舞して、木の実をいくつかくわえると、鳥たちの包囲を抜けて逃げました。渡り鳥の力強い羽ばたきに、彼らが追いつけるはずもありません。

そうしてルチアはじつも広場で、画家に取つてきた木の実を「ちやうしょ」しました。

「わあー。とても美味しいよ。ありがと」

「へへ、他の鳥たちにはいろいろ言われてしまつたんだけれどね。あなたのおかげで、わたしはわたしを肯定できたの」

そう胸を張つて言いながら、ルチアも木の実をひと粒ついぱみました。ルチアの心の在り方は、たしかに変わつていました。

ルチアと画家は、以前よりも仲良くなつて、さらに心を通わせるようになりました。

けれど終わりは必ずやります。ルチアは冬になら前に、この街を発たなくてはならないのですから。どうとうそのときはやつてきました。

「……三日後、わたしたちはこの街を  
「そつか……もう、冬が近いからね」

別れがくることなんて、わかりきつていました。ルチアは渡り鳥で、画家は定住者。本当なら交わることはない関係なのです。

画家もそれはわかつてゐるようでした。少しだらしそうにしながらも、すぐに受け入れます。受け入れて、こんなことを言いました。

「ねえルチア。きみも、いろいろといそがしいだろうけど……最後の日も、ぼくに会いにきてくれないかい？」  
「もちろんだよ。わたしだってあなたのことを、友達だと思つているんだから」

言わなくても、初めからそのつもりでした。ルチアだって、もう画家と会えないのはさびしいのです。しっかりと、別れを告げる気でいました。

「仲間と旅立つ準備をしなくちゃいけないから、たくさんは会えないけど……最後の日は必ず、あなたに会いに来るよ」

ルチアと画家は、そう約束しました。

それから旅立ちの日まで、ルチアは画家と一度も会えませんでした。暇なときにはあの広場をのぞいたこともあります。

るのですが、めずらしく、画家はそしにこませんでした。

そのままひとつ、別れの日が訪れます。

「ああ、よかつた。きてくれた」

広場に舞い降りたルチアを見て、画家はほつと安心したように息を吐きました。

「当たり前だよ。だって約束したじゃない」

そう答えるながら、ルチアは、画家が何やら大きな板を持つていました。固体でよつやく抱えられるような大きさで、布がはりつけられた厚い板です。

「……もしかして」ルチアは気づきました。

「あなたが持っているのはキャンバス?」

「そうー。 そうだよ。これを、きみに見せしかったんだ。きみへのプレゼントだよ」

画家は嬉しそうに頬をゆるめると「じゃーん」なんて言いながら、そのキャンバスをルチアに見させてくれました。

「きみのために描いたんだ……。 きみは、この街の冬の様子を知りたいって。 実物はむりでも、ぼくの絵でなり、きみに冬を見せてあげられると思ったんだ」

それは、雪におおわれたこの街の絵でした。建物のやねも、木も、すべてが真白に包まれて輝いています。降りしきる雪の綿は、小さくてぼんやりとしていて、今にも溶けていちゃうです。はがね 憐くて、美しいのです。

ルチアの知りえない冬景色が、今たしかに、画家の絵のなかに広がっていました。

「……やれい」

ぽつりともれたルチアのつぶやきを聞いて、画家は満足そうにうなずきます。

憧れた雪景色を、ルチアはじっと眺めます。長旅にこの絵を持つていくことはできません。せめていつでも思  
い出せるように、絵を田に焼もつけてください。

「……ありがと、本当に。あなたは、世界一の絵描きだよ。」

ルチアはやう画家を称えました。画家ははにかみながら。

「礼を貰ひのはまくのせうだよ。この絵はぼくが今まで描いたなかでいちばんの傑作だ。<sup>けっさく</sup>きみのために……友達  
のために描いた絵だから、きっとこんなに美しく描けたんだ。きみに托ねて、本当によかったです」

「わたしも、あなたに会えてよかったです」

まぎれもない本心でした。

ルチアはこれまで、土地を旅立つたび、悲しさを感じてきました。もつといいにこたうと思つてしましました。  
けれど今回は。画家が知らない世界を知る楽しさを、あんなに生き生きと語つてくれたから。新たな世界に旅

立つことが、ルチアはいつもより怖くないのです。怖くないじいのか、胸がわくわくとはづけているのです。

「また会える保証はない……でもわたしは、あなたのために、すみすみまで世界を見てくるよ。またあなたと会  
えたとき、こんな場所があつたって教えてあげられるように……」

「ぼくも、きみのために絵を描く。きみが知らない冬の景色をたくさん描きためて、またきみに見せてあげる」

一羽と一人のないものねだりが、歯車のように歎み合つた瞬間でした。お互いの夢をお互いが補つて、新しい  
願いが紡がれます。

「やめのない、また会う日まで。わたしはあなたの」と、絶対に忘れないから」

ルチアの言葉に、画家は力強くうなづいた。

「ぼくもきみを忘れない。きみと話した時間は、ぼくの宝物だ、忘れるもんか」

ルチアが最後に見た画家の笑顔は、じびきりまぶしく輝いていました。

「やよなら、ルチア。きみのこれから旅路が、よきものでありますようにー。」

画家と別れ、街を飛び立つ直前、ルチアは浜辺に立ち寄りました。仲間の何羽かはもうすでに出発していて、水平線上に彼らの姿が見えます。

すてきな友達に出会いました。画家のおかげでルチアは、じかに前向きに、海を渡つてじかにとができました。長い目で見ればほんのわずかの彼との邂逅かうじゆうが、今ルチアの心を奥底から照らしていました。

ルチアは渡り鳥。一つの土地になじみきることはできないけれど、そのかわりたくさん世界を知れる。誰かと言葉を交わせば、ルチアは知りえない土地の別の姿にだつて触れられる。

かつてない希望に浮かされるまま、ルチアは浜辺に絵を描きました。画家のまねまねいです。翼と足を使って、砂にゆるやかな曲線を引いていきます。

できあがつたそれは、何がモチーフかもわからなくて、絵と呼ぶにはあまりに不格好だったけれど。

ルチアはそれをじせりへ眺め、やがて満足げにうなづきました。そして、今度じか、街を去り、南へと出発します。

ルチアが飛び去つてじせりへしたじか、ルチアの残した絵もじわは、寄せては引く波に流れ、消えていきました。